The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本で子育てをする国際結婚家庭における親の教育姿勢とその影響 ： ミャンマー人母親二人の事例比較
Author(s)	真嶋, 潤子; トゥトゥヌェエー
Citation	日本語・日本文化研究. 2017, 27, p. 39-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69214
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本で子育てをする国際結婚家庭における親の教育姿勢とその影響

−ミャンマー人母親二人の事例比較−

真嶋潤子・Thu Thu Nwe Aye

1　はじめに

少子高齢化に直面しつつある日本社会は、様々な目的やカテゴリーで外国人を受け入れて来ている。法務省（2017）によると、平成 28（2016）年末現在で在留外国人数は 238 万 2822 人であり、前年末より 15 万 633 人（6.6%）増加している。その中で、日本人の配偶者として国際結婚の結果来日した人は、過去５年間 15 万人前後を推移し、139,327 人となっている。

国際結婚家庭の子どものみについての調査は管見では見当たらないが、文科省（2017）によると、日本語指導が必要な児童生徒は 34,335 人で、前回調査より５千人以上増加している。また、日本語指導が必要な日本国籍の児童生徒数は 9,612 人で 1,715 人増加している。保護者の都合により、日本生まれまたは幼少期に来日した日本語を母語としない子どもたちは確実に増加しており、その傾向は近い将来に変わりそうにない。

国際結婚家庭で子どもがいる場合、その子どもの教育方針とりわけ言葉と文化の教育は、遅かれ早かれ本人のアイデンティティに関わってくる事柄であり、子どもの将来の生き方にも関わる重要事項である。この大切な問題について、当事者はどのような情報を得てどのような判断を下しているのだろうか。それは、プライベートな問題でもあり、なかなか他人が知ることはできない。

本稿では、日本人と結婚したミャンマー人女性２名へのインタビューによって、ふたつの家族の全く異なる考え方とその結果を報告する。ミャンマー語[1]を母語としたインタビューを同じ２人に 2014 年と 2017 年の２回にわたって行うことで、彼女らの環境と考えの変化を追うこともできたので、そこから見えたもの、わかったことを報告する。特に日本人の父とミャンマー人の母を持つ子どもの言語とアイデンティティが親や周りの環境にどのように影響されているかを考察する。

2　先行研究

カルタビアーノ宮本（2014）は「アイデンティティ」とは「ある社会で特定の時間と場所において個人や団体が自己を名付けたり、特徴づけたり、社会的な位置づけ（positioning）をしようとする時に与えられる社会的、対話的、談話的選択肢」（Pavlenko & Blackledge, 2004）であるがゆえに、言語使用の中で社会的に形成され心の葛藤となり変化しうるものであると述べている。また中島（2016）は、二言語に触れて育つバイリンガルの子どもたちは、言語と切り離すことのできない文化面も理解したり身につけたりしていくので「バイカルチュラル」になるが、アイデンティティは「ことばができなくても

[1] 本稿では、国名はミャンマー、言語はビルマ語と言うこともあるが、筆者の希望に従いミャンマー語と表記しておく。

その言語グループへのアイデンティティを持つことが可能」だからことばや文化とは問題が異なると述べている（p. 215）。さらに、Hakuta（1986）などを引用して、子どもが社会的に劣位にある親のことば・文化を犠牲にして社会的に優位な言語・文化を習得していくと、「アイデンティティの「無国籍者」をつくってしまうこと」があり、主要言語を身につけたものの、「公」のグループにも入れず、かといってことばを失ったために「私」のグループからも受け入れられなくなる、というような状況で、親子のコミュニケーションの断絶、疎外感、情緒不安、学業不振、社会不適応などの問題に陥ることの可能性を指摘している（pp. 216-7）。

本稿では、実際に日本で子育てをしているミャンマー人保護者２名の生の声を聞くことで、彼女らが何を考えてどのような教育方針を立て、その結果子どもはどのように成長しているのか、それぞれ異なった環境で条件も異なる中での教育戦略を考えたい。いずれの家庭の子どもたちも、将来は日本社会で活躍する人材となってくれることを考えると、どのように健やかな成長を保証していくことができるのかを考えるための基礎研究としたい。

３　調査概要

３−１　調査目的

日本人男性と結婚して子育て中のミャンマー人女性二人に、子どもの言葉と文化を中心的話題としてかなり詳しいインタビューを行い、ミャンマー語と文化を教えるか教えないかという点で、全く異なる考え方と子どもへの影響を考察する。国際結婚家庭の教育戦略あるいは教育姿勢を考えるための基礎研究となる資料を提供することを目指す。

３−２　調査対象者

日本人男性と結婚したミャンマー人女性、ＡさんとＢさんに調査協力を依頼した。この二人に絞ったのは、Ａさんは子どもたちに日本語だけを教え、ミャンマー語を教えていないのに対して、Ｂさんは日本語だけでなくミャンマーの言葉や文化を教えているという対照的な二家庭だったので、その方針と影響の違いに興味を抱いたからである。

Ａさんは、2014 年当時小学校３年生の男の子と幼稚園年少の女の子の母親で、関西地方在住である。Ａさんは日本人と結婚して、2005 年に来日した。８歳の小学校３年生の息子と３歳の幼稚園年少の娘を持ち、夫の実家である関西地方で夫の両親と同居している。ミャンマーの大学では日本語を専攻して勉強していたが、日本に来たばかりの時は周りの人の方言がわからず、困ったという。慣れてからは何の問題もないという。

Ｂさんは日本人と結婚して、2002 年に来日した。７歳の小学校１年生の息子を持ち、夫の実家である関東地方に夫の両親と同居している。

3－3　調査方法

自身もミャンマー人である調査者が、同国出身の女性２名にインタビューを行った。2014 年 12 月と２年７ヶ月後の 2017 年７月の２回行った。

１回目は、Ａさんへの 50 分のインタビューとＢさんへの１時間５分のインタビューとによって調査した。２人は関西地方と関東地方に住んでいるため、直接会うことはできず、インターネットの電話でインタビューをした。インタビューは基本的にミャンマー語で行ったが、途中で日本語になった時もある。インタビュー内容を録音し、文字化して和訳したものをデータとして使った。

以下に、１回目の調査結果をまとめる。その後、２年７ヶ月後のインタビューで見られた変化についてまとめる。

4　結果

本節では、インタビューの結果を、キーワード分析をして特に差が顕著であった以下の観点に絞って調査協力者の生の言葉を生かしながら報告する。

１）母親の母語ミャンマー語を子どもに教えるかどうか

２）日本社会における母親の周りとの関わり方

３）ミャンマーへの旅行とミャンマーの国と文化の伝え方

４）子どものアイデンティティと将来

4－1　二人の母親の教育方針と実際

Ａさん、Ｂさんへの個別インタビューのデータに基づいて、以下に説明する。

4－1－1　関西地方に住んでいるＡさん家族の場合

子どもたちにミャンマー語を教えているかどうか聞いたところ、教えていないとのことだった。仏教徒であるため、ミャンマー語でお祈りの仕方は教えているが、それ以外は言語も文字も教えていないという。

Ａさんは子どもたちは日本国籍になっているため、これからも日本人として育てていくつもりだと言っている。Ａさんによると自分の住んでいるところには外国人が少ないため、子どもが「ダブル」であることが知られると周りの日本人に外国人として見られ、いじめられたり、差別されたりするのが心配であるという。したがって、子どもたちにはミャンマー語も教えず、ミャンマーの名前も付けていないととのことだった。

子どもたちにミャンマー語を教えない理由として「家でミャンマー語で育てると、日本語も英語も弱くなってしまう可能性がある。学校での使用言語は日本語であるため、ミャンマー語は話せなくてもいいと思う」との答えだった。子どもたちがミャンマー語が話せないため、ミャンマーに行った時にはＡさんが子どもとミャンマーの親戚の通訳をするとのことだった。

Ａさん家族の場合、日本人である父親が幼少時に学校で「朝鮮人」[2]がいじめや差別を受けていたことに直面した影響により、外国人の少ない地方では外国人はいじめや差別を受けるに違いないという先入観を持ってしまったと考えられる。したがって、両親とも自分の子どもがいじめや差別を受けることがないようにミャンマーの血が混ざっていることを示さず、日本人として育てようという強い気持ちを持っている。

また、周りはＡさんがミャンマー人であることを知っているかどうか聞いてみたところ、Ａさんは顔つきが日本人に似ているため、日本人だと思われているとのことだった。自分がミャンマー人であることを話したことはあるが、日本人に非常によく似ているため、Ａさん自身がダブルだと思われることがあるとのことだった。ミャンマー人である母親自身も日本人に同化しているようにみられ、「ミャンマーに住んでいる自分の親がいなくなれば、ミャンマーに行く回数も少なくなると思うので、その時は日本のパスポートを取ることも考えている」と述べている。2014 年調査時点の状況からすると、おそらく子どもたちはミャンマー人というアイデンティティを意識せず、日本人として生きていくことになるのではないかと考えられる。

長男は小学校３年生で、Ａさんがミャンマー人であることも自分がダブルであることも知っているが、次女はまだ知らないという。

Ａさんとしては子どもたちにこのまま日本人として育ち、将来いい大学に入り、いい仕事をしてほしいと思っているとのことだった。

４−１−２　関東地方に住んでいるＢさん家族の場合

Ｂさんは日本人と結婚して、2002 年に来日した。７歳の小学校１年生の息子を持ち、夫の実家である関東地方に夫の両親と同居している。

子どもにミャンマー語を教えているかどうか聞いたところ、教えているとのことだった。小さい時から子どもにミャンマー語で話しかけたり、仏教徒であるため、ミャンマー語でお祈りの仕方も教えている。ミャンマーの名前も付けていて、ミャンマー文字も少しずつ教えているという。子どもがミャンマー語に興味が持てるように遊びの感覚で教えているという。

まだ７歳で、日本ではミャンマー語で話す機会がほとんどないため、子どもはミャンマー語で話せる

[2] 当時そのように呼ばれていたということで、そのまま表記する。

わけではないが、ミャンマー語で話しかけられる時はミャンマー語で答えることはできる。ミャンマーに行ってしばらく住むと親戚や周りの人がミャンマー語で話すため、子どもも他の人とミャンマー語でコミュニケーションを取るようになるという。

Ｂさんは子どもの国籍は日本になっているが、できれば日本のパスポートもミャンマーのパスポートも持たせたかったと言っている。しかし、出産時にミャンマー大使館への報告が遅れたため、ミャンマーのパスポートが取れなくなったのが非常に残念だとのことだった。

Ｂさんによると毎年子どもを連れて、ミャンマーに帰っているとのことだった。ミャンマーに行く前から子どもに親戚の写真を見せて名前を教えたり、親戚の話をしたりしているため、ミャンマーに行くと親戚とすぐ仲良くなるという。ミャンマーに行けば、親戚や従兄弟達と遊べるため、一人っ子の子供はミャンマーの方が楽しいと言っているようだ。子ども自身にもミャンマーが楽しいかどうか聞いてみようという話になり、ミャンマー語で「ミャンマーは楽しい？」と聞いてみたところ、子どもがミャンマー語で「楽しい。」と答え、それから日本語で「マンゴーもおいしいし、水かけ祭りも楽しいから。」と答えた。そして、Ｂさんから子どもがミャンマーに親しみが持てるようにどのように育ててきたかについて説明があった。

Ｂさんは自分が住んでいる市の文化大使として 10 年も活躍しているとのことだった。Ｂさんは文化大使として地域の様々なイベントでミャンマーの文化を紹介することや日本の幼稚園や小中高校などに行ってミャンマーについて特別講義をすることなどがあるが、そのような時は子どもも連れて行っているという。日本の幼稚園や小学校に行く時は小さい子どもにも興味を持ってもらえるようにミャンマーについて話すだけではなく、ミャンマーの遊び方を教えたり、ミャンマーの民族衣装を着て行ったりしている。自分の子供は小さい時からそのようなものを見て育ってきたからか、子供が幼稚園の時、子供（Ｂ君）のミャンマーに対する思いを知り、自分も驚いたというエピソードを述べた。

Ｂ君が３歳児の時、幼稚園で運動会があり、教室で世界各国の国旗を飾っていたが、ミャンマーの国旗がなかったことに気付いたＢ君が、先生に自分のお母さんの国の国旗がなぜないのか聞いたという。学校にはミャンマーの国旗がなかったため、先生が母親であるＢさんに電話で状況を説明し、国旗があれば貸してほしいと依頼したため、ミャンマーの国旗を息子の幼稚園に持って行って貸したことがあるとのことだった。

今でもＢ君は学校で先生や友達に母親のミャンマーに関する活動やミャンマーに旅行した時のことなどを話しているらしく、Ｂ君のクラスメートの日本人のお母さんたちからも自分たちの子どもが大きくなったら、Ｂ君と一緒にミャンマーに遊びに行くと言っているという話を聞くとのことだった。

Ｂ君が自分のことを何人だと思っているのか聞いてみたところ、日本語で「パスポートは日本人だから、日本人。」と答えた。母親のＢさんは「パスポートは日本人になっているのだが、母親の自分がミャンマー人であるため、ミャンマーの血が混ざっているということが理解できるように説明している」という。Ｂさん自身は年を取ったら、ミャンマーで暮らしたいと思っているようだった。Ｂ君が将来の夢はパイロットと言っているため、国際的な子に育ってほしいとのことだった。

最後に、Ｂさんの自分の「パスポート」に関する心情を熱く語ってくれたところを引用する。（下線は筆者）

Ｂ：私はミャンマーパスポートを持っている。夫は日本パスポートを持ってほしいそうだけど。日本長いし、「永住権」で住んでいるから。私は言ったの。自分の家族。自分の国。自分の親戚、自分の職場、全てを捨ててきたから、最後にこの国にいてもパスポートだけは私の最後の希望で私の所有物だから。パスポートも手放したら、全てなくなってしまうから。あなたは自分の国に住めるし、自分の愛する家族と一緒に暮らせるし、自分の職場の人と一緒にいられる、私はたくさんの物を捨ててきたから、パスポートはどうしても変えられない。だから、海外旅行する時、ビザを取らないといけないから忙しい。行きたいのは夫だから、ときどき私が委任状を書いたら、夫が旅行したいのは自分だからと言って私の代わりにビザ取りに行ってくれる。

Ｔ：本当に素敵ですね。本当にありがとうございました。

ここで、ＡさんとＢさんの日本での子どもの教育に関わる項目を表１にまとめておく。

表１　母親二人の子育て方針の比較　（2014 年のインタビュー結果）

ミャンマー人母親	（関西地方在住）Ａさん	（関東地方在住）Ｂさん
家族構成	日本人の夫、息子（小３）、娘（３歳）、夫の両親	日本人の夫、息子（小１）、夫の両親
ミャンマー語の教育	していない	している
子どものミャンマー語能力	できない	聞いたらわかる 話しかけられたら答えられる
子どものミャンマー語の名前	ない	ある
周りから何人と見られているか	日本人（Ａさんは顔が日本人のよう）	ミャンマー人
ミャンマー料理	作らない（できない）	作る
ミャンマーの文化	触れない	意識的に触れさせる
ミャンマーへの旅行	行くことはあるが、自分の親がいなくなったら、ミャンマーに行くことも少なくなるだろう。その時は日本に帰化することを考えている。	毎年行く 楽しみにしている
ミャンマー滞在中の子どもの言語	Ａさんが子どもに全て通訳する	日本にいる時から、ミャンマーのことをよく話しているので、すぐに慣れてミャンマー語で話せる

子どものアイデンティティ	日本人として育てられ、同化している（ミャンマー人というアイデンティティを全く感じないで生きていくだろう）	日本人（国籍）だが、ミャンマー人としての意識もある
子どもが日本国籍である理由	外国人はいじめや差別を受けるに違いないとの先入観から、日本人である方が良いと考えた	ミャンマー大使館への届けが遅れたためミャンマー国籍が取れなかった
子どもの将来について	このまま日本人として育って、いい大学に入って、いい仕事をしてほしい	希望としては日本とミャンマーの両方のパスポートを持たせたかった。子どもはパイロットになりたがっている。「国際人」になってほしい

日本人とミャンマー人の２つの国際結婚家庭の母親に行ったインタビュー調査からわかることは、子どものアイデンティティ形成に周りの環境、特に、当然とは言え親が強く影響を及ぼしていることである。

「日本人として」生きていくよう子育てしているＡさん一家と異なり、Ｂさんの家族の場合、自分の影響で子どもは小さい時から自分がダブルであることを理解し、日本人というアイデンティティを持ちながらも、ミャンマーの国旗を気にしたり、先生や友達にミャンマーのことやミャンマー人の母親のことを話したりしていることからミャンマー人としてのアイデンティティも忘れず保っているように感じられる。まだ本格的に勉強しているわけではないが、母親からミャンマー語を習っているということだったため、将来バイリンガルになる可能性は高いと思われる。

子どもたちがまだ小さいため、直接インタビューすることができず、母親とのインタビューに基づいて考察しているため、必ずしもここで考察した通りの結果になるとは言えないだろう。カルタビアーノ宮本（2014）が大人になるまで日々の生活の中でアイデンティティは変化しながら少しずつ形成されていると述べているように、子どもたちはこれからアイデンティティ交渉をしながら生きていくことになるのだろう。年齢とともに子どものアイデンティティがどのように形成されていくかこの段階ではわからないが、子どものアイデンティティ形成が親の影響によって大きく左右されているのは確かであるのではないだろうか。次に、２年７ヶ月後に再度応じてもらったインタビューの結果わかったことを、その間の変化を中心に報告する。

４−２　2017 年（２年７ヶ月後）のフォローアップ・インタビュー結果

2014 年のインタビュー調査では、日本人に同化して、ミャンマーの言葉も文化もほとんど子どもに伝えていなかったＡさんであるが、この３年近くの間に、変化があった。下の子ども（娘）が、文字や言語に興味を持っているので、ミャンマー語を教えたり、ミャンマーの言葉や文化についても話したりすることが増えたという。３年前には娘にミャンマー人とのダブルであることも教えていなかったが、自

分の名前がカタカナであること、ミャンマーに行ったことなどで、興味を抱いて母親であるＡさんに頻繁に質問をするようになったという。

Ａ：ミャンマー人なの？ミャンマーで生まれたの？小さい時から住んでいたの？日本にいつ来たの？とかね。(笑)

また、子どもの宿題を見る中で、子どももＡさんも少しずつ変化して行ったようである。

Ａ：今も学校の宿題がある時、例えば、６年生の勉強、社会とか歴史は知らない名前がいっぱいあるの。ミャンマー人だから。日本の歴史とかね。そういう時は娘が私に知らないの？とか、ミャンマーではどういうことを勉強するの？とか聞くことがあるの。

このように、Ａさんが子どもに聞かれたことに誠実に答えていく中で、子どもは母親がミャンマー人であることを理解するようになった。

Ａさんは、日本の歴史を子供に教えられるよう、先に読んでおくなどの努力をしている。

Ａ：たとえば、化学とか世界の歴史とかだったら、ちょっと知ってるけど、日本の歴史は人物の名前も難しいから。

Ｔ：そうだね・・名前は難しいよね。

Ａ：今は６年生の勉強を一緒にして、子どもに説明するために自分が最初に１回読んでおいてからまた説明する。

ミャンマーに滞在する際の使用言語については、Ａさんの甥や姪が英語と日本語も少しわかるまでに成長したことに加え、Ａさんの子どももそこでミャンマー語を覚えたりして楽しく過ごせるようになっているという。また、Ａさんの父親が病気になり、Ａさんに帰国してほしいと頼んだことなど、母国の親族の状況変化から、Ａさんもミャンマーに想いを馳せることが多くなっているようである。

Ａさんの夫が心配していたように「外国人だと知られると、地方ではいじめられたり差別されたりするかもしれない」という問題は、今のところないという。またフィリピン人の知り合いで日本語ができない人が孤立している様子を聞いて、「私は日本語が話せるから、初対面の人とでも話すようになる。あまり話せない人は困っている。日本語を勉強してきてよかったと思う。」と、来日前の日本語学習を評価し、安堵している。子どもの将来については「本人にまかせる」と言っていて、現在のところ自由にさせる方針である。

一方Ｂさんについては、ミャンマー語をきちんと教えようとして、息子と工夫して努力している様子を語っている。

Ｂ：それから、息子は nga と nya・・・息子は覚えるように努力しているけど、紛らわしい発音は間違えてしまう時がある。そういう時、息子はわかっているのにって悔しがっている。あと、息子が小さかった時、着ていたミャンマー文字のついたＴシャツがあるの。もう息子は着れないけど、捨てずにダイニングにハンガーにかけて置いてある。それを黒板のように使って、それを読んで息子に聞かせている。息子はそれを見てミャンマー文字を書く。お風呂にもスポンジでできているミャンマー文字のボードがある。息子はお風呂が長いから、お風呂に入っている時もそれが見えるようにね。（笑）

Ｔ：へぇ！すばらしいですね！前回話した時もＢさんは息子さんが興味を持てるようにミャンマー語を教えていると言っていましたもんね。息子さんにミャンマーの名前もありますし。

Ｂ：なんというか・・100 パーセント完璧とは言えないけど、私は少しずつ少しずつ息子が興味を持ってくれるように言っている。学校でも・・今は音楽部に入っているの。

この音楽部には声が綺麗な息子が選抜されて入り、厳しい練習について行っている様子を詳しく語っている。大変だが、才能があることが評価されて満足している。Ｂさんは、それ以外にも、息子がミャンマー語で親戚と話ができることを満足げに語り、ミャンマーの訪問先の観光地を吟味して、ミャンマーの素晴らしいところを家族で旅行する計画や、日本と比べると観光地が整備されていないが良くなる可能性が大いにあることを楽しく語っている。

息子の性格や、息子が服装を自分で選ぶようになったという成長ぶりなど、息子のことを夫といつも注意深く見つめて育てている様子を述べている。

将来については、以下のように述べて夫とも良く話をしている様子がわかる。

Ｔ：息子さんは前回パイロットになりたいと言っていたんですけど、今でも同じ夢なんですか。

Ｂ：そう。今もそれをやりたいって。息子に何になりたいか聞いたら、私たちはよく旅行していたから、私と主人を自分が連れて行きたいと言ってくれた。私は英語を勉強しないと、と言ったの。英語の方は‥息子は主人の考え方に影響されているところがあって、主人は日本はすばらしいし、日本の教育水準も高いと言っている。私は息子にアメリカとか他の国に留学したらと言ったら、主人は息子と離れるのがいやなの。

英語を学ぶ重要性と、Ｂさんはアメリカなどへの留学を進めているが、夫は息子と離れたくない（とＢさんが思っている）ので、日本で勉強を続けてほしいと思っているということである。また、Ｂさんは、日本人にミャンマーのことを紹介する活動を様々に行ってきた経験から、今後はミャンマーの人に広く日本文化の良いところを紹介するような活動を、夫が旅行業に転職することも視野に入れて考えている。

Ｂ：もう１つは私はミャンマー人に日本の文化を紹介したい。

Ｔ：アウトバウンド？

Ｂ：（これまで日本で）ミャンマーの文化を紹介してきて、今は日本人の多くもミャンマーの文化がわかるようになってきている。できればミャンマーに帰って、例えば、今ミャンマーでもやっている人はやっているけど、私はどんな階層の人にでも・・日本でやっているように学校とかでやりたい。今はミャンマーでは大使館とかに行けるような限られた人とか、MAJA（ミャンマー元日本留学生協会）とかと関係がある人しか（日本のことを）知らないから。

Ｔ：そうですね。

Ｂ：そういうのを「一般」の普通の人にもわかってほしい。日本の基本的な文化や規則正しいところや考え方などいいところを知ってほしい。そういうのをできれば頑張っていくつもり。

ここから伺えるのは、社会的経済的に特に問題のない暮らしを実現している国際結婚の夫婦が、母語（継承語）ミャンマー語も日本語（現地語）もできる自慢の息子の将来について、建設的に考えている様子と、自分の子どもの教育にとどまらず、両国の人々への文化紹介を進めたいという意思である。こ

こには、個人の子育て体験をもとに、真摯に異文化理解を進めようとする民間交流の萌芽と言っても良いものが見られるのではないだろうか。

5　おわりに

３年前に第１回のインタビュー調査をした段階では、同じように日本人男性と国際結婚をしたミャンマー人女性ＡさんとＢさんが、ミャンマー語と文化の子どもへの継承については、全く逆の教育方針で子育てをしていた。Ａさんは、夫が外国人差別の対象になることを心配して、日本人として生きていこうとしていた。Ｂさんは、住んでいる市の文化大使としてミャンマーの言葉や文化を日本人に紹介する活動を積極的に行なっており、そのような機会には子どもを連れて行って、母語・母文化に触れさせようとしていたほどである。

筆者たちは、Ａさんの子どもが自分のアイデンティティについて、後で困ったり苦しんだりするのではないかということを心配していた。３年後に再度この二人にインタビューをした結果、Ｂさんの方は予測通り子どもは安定して日本とミャンマーの言葉も文化も理解を深めつつ、充実した学校生活とミャンマーを大切にした親戚づきあいや旅行を楽しんでいる様子である。Ｂさんの子どもはミャンマー語で会話ができ、文字も覚えつつある。

驚いたのは、Ａさんの子どもで、特に下の子がミャンマーの文字や文化に興味を持ち始めてＡさんによく質問するようになったことをきっかけに、Ａさんも喜んで子どもに教えていることである。Ａさんの子どもはミャンマー語ができなくても、あちらに行った時には、現地のいとこたちが、英語や日本語で対応できるまでに成長し、Ａさんの子どももミャンマー語を覚え始め、コミュニケーションが成り立つ経験をしたことである。ミャンマーの人や文化に肯定的なイメージを持ち、これからももっと知りたいという動機付けが少し芽生えたようである。

今後この二つの家族がどうなっていくのかはわからないが、先行研究でも指摘されていたように、子どもたちの成長に従って、ミャンマーと日本のアイデンティティを、少しずつ内面化して行くのだろうと想像している。どちらの言語も文化も、大なり小なり彼らの血肉となって行くものと考えられる。ＡさんとＢさんという二人の母親へのインタビューからは、全くと言って良いほど悲壮感はなく、日本に根を下ろして子どもの成長に合わせた母語・母文化との接触が行われている。幼い時からミャンマー語・文化に触れていたＢさんの子どもはもちろん理解を深めているが、Ａさんの子どもたちは息子は興味を持っていないようだが、下の娘は興味を持ちミャンマー語と文化を少しずつ身につけてきているようである。

今回２度のインタビューができたことで、２家族のそれぞれの変化が見られた。ミャンマー語を全く教えず、完全に日本に同化したかに見えたＡさん一家も、下の娘の知的好奇心から、ミャンマーのことや言葉が、日常的に話題になりつつある。Ｂさん一家は、バイリンガルに育ちつつある息子を巡って、両親が熱心に教育に関わっている様子が垣間見られた。さらに将来はミャンマーの人々に日本文化を理解してもらう活動を仕事にすることも考えられている。

Ａさん一家の変化からは、調査者として１回の調査で、「日本に同化して日本人になった／ミャンマーの言葉と文化を完全に捨てた」などと断定してしまうことへの危うさを警鐘として受け取ることができたと考えている。子どもの成長に伴い、親の教育姿勢も変化しうるのであり、複文化の豊かさを途中からでも実現することも可能であると捉えることができるだろう。可能であれば、今後も縦断的にこの２家族の３人の子どもたちがどのように成長して行くのか、子どもたちの声や、日本人の父親の声も含め調査できると良いと考えている。

＜参考文献＞

カルタビアーノ宮本百合子（2014）「子供のアイデンティティ」宮崎幸江編『日本に住む多文化の子どもと教育－ことばと文化のはざまで生きる』pp.49-87,上智大学出版

桜井厚・小林多寿子 編著（2005）『ライフストーリー・インタビュー―質的研究入門』せりか書房

竹内理・水本篤(2012)『外国語教育研究ハンドブック－研究手法のより良い理解のために』松柏社

中島和子（2016）『完全改訂版　バイリンガル教育の方法-12 歳までに親と教師ができること』アルク

宮崎幸江編　2014『日本に住む多文化の子どもと教育－ことばと文化のはざまで生きる』上智大学出版

Hakuta, K. (1986) *Mirror of language: The debate on bilingualism.* NY: Basic Books.

＜参考 URL＞

・法務省「平成 28 年末における在留外国人数について（確定値)」(平成 29 年 3 月）(2017/10/29 最終アクセス)

http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00065.html

・文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成 28 年度）の結果について」(2017/10/29 最終アクセス)

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/06/__icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1386753.pdf